

回答については、質問時の基準に沿って回答しておりますので、現時点とは異なっている場合もございます。

#### Q20（感染性廃棄物、針刺し事故、職業感染予防策）

当院外来部門では、注射セットとして以下の医用器具・器材を非無菌的であるバット上で使用している。針廃棄ボックスの取り扱いとして同一バット上に置いて針処理しているが感染対策上問題があるか否か。針廃棄ボックスを写真のように点滴セットと同一バットに置くべきでないと主張する医師がいますが、業務上針廃棄ボックスだけを別のトレイで運ぶことは現実的ではないと考えます。いかがでしょうか？

※写真別添

注射セット

酒精綿セット

駆血帯

針類箱（翼状針・注射バット）

アンダーバット（小）

ゴム手袋

薬液を詰めた点滴セット

お針箱

#### A20

ご質問の趣旨は、同一トレイ（バットというよりトレイという用語が一般的と思います）の上に、清潔なものと、使い終わった針を入れる、いわば汚染された内腔をもつ、針廃棄ボックスを、同居させてよいかどうかということと理解します。2007年改定された米国CDCガイドラインで、安全な注射手技という項目が追加されています。これは、あくまで、注射の段階での注意で、1回1回新しいディスポ手袋を用い、注射部位を丁寧に消毒して、という手技であり、その後の針のボックスに関しては、適切に管理（内容物が8割程度になったらボックスを廃棄する等、外に汚染物が飛び出したりしていない状況）されていれば、同じトレイに乗っていても何ら問題ないと解釈いたします。むしろ、このボックスを持たずに、むき出しの使用済の汚染された針がトレイにじかに乗せたりすることを避けるべきです。針廃棄ボックスのみ別のトレイに乗せて運ぶことは、ご指摘のように非現実的であり、医療者の両手がふさがって、かえって危険と思います。当院でも、先生の写真と同様に同一トレイに乗せています。ただし、1患者1トレイで、スタッフステーションに帰ってきて、トレイを空にしたら、その表面をアルコールで清拭しておくことは必要と考えます。

回答については、質問時の基準に沿って回答しておりますので、現時点とは異なっている場合もございます。

#### Q2 1 (感染性廃棄物、輸液ライン、点滴調整)

1. 病棟詰所内の医療廃棄物につきお聞きしたく存じます。

医療廃棄物はもちろん鋭利なものは法律上認められたバイオハザードマークのついた耐貫通性のプラスチック容器と、更に鋭利なもの以外はダンボール箱（バイオハザードマークのついた）に廃棄しておりますが、詰所内にそれらを置いておく際、蓋は必要ですか？廃棄の際蓋に触れなければいけないのでかえって不潔になるように思えるのですが。

2. 病院詰所内でのIVHなどの点滴の調合についてお聞きしたく存じます。

IVHなどは十分清潔な空間で調合すべきかと考えますが、成書によれば清潔に注意すればクリーンベンチではなくても詰所内で十分調合可能との事ですが、前項の医療廃棄物とはどのくらい離れたところで点滴を調合すればいいのでしょうか？

なお、当院は高齢者を中心とした長期療養型病棟と一般病棟からなり、手術室、ICU、救急はありません。

#### A2 1

1. 病院内の廃棄物には、一般廃棄物と感染性廃棄物があります。問題となるのは感染性廃棄物です。血液、体液、排泄物などが付着した廃棄物は、感染性廃棄物としてバイオハザードマークをつけ色分けし分別する必要があります。

①血液などの液状、泥状のもの：液漏れしない密封容器：赤色

②固形状のもの（血液などが付着したガーゼなど）：丈夫なプラスチック容器を二重：橙色

③鋭利なもの（注射針など）：耐貫通性容器：黄色

質問のなかに、詰所内に医療廃棄物を置くとき、蓋に触れるため蓋は必要かとの質問ですが、むしろ詰所内に感染性廃棄物を置くことが問題です。詰所内ではなく廃棄物専用の部屋を設けることです。ゴミ捨て場に詰所があるのはよくありません。

感染性廃棄物の保管場所は、関係者以外立ち入らないように配慮し、入口には感染性廃棄物であることを表示（バイオハザードマーク）することです。また、それぞれ廃棄物容器には蓋をし、手が触れないよう足などで開くよう工夫すべきです。感染性廃棄物は袋に詰めすぎないようにし、その保管は極力短期間とします。当然のことですが、感染性廃棄物を扱うときは、手袋の着用が必要で、扱った後は手袋を捨て、手指は石けんと流水で洗います。

2. 点滴に使用する際の調合場所の問合せですが、そのものが患者にどのように使うかを考えてください。体内に挿入するのであれば当然、不潔操作は危険です。詰所内などでその行為（調合）を行うことはよくありません。調合・調整室（無菌操作ができる清潔な部屋）あるいはクリーンベンチ内で行うことです。医療廃棄物とどのくらい離れたところで行えばいいかの問題ではありません。